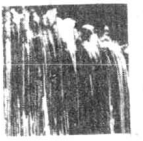
滅亡過程の文学

松本健一

滅亡過程の文学



松本健一

冬樹社

著者略歴
松本健一(まつもと　けんいち)

1946年群馬県前橋市生まれ　東京大学経済学部卒業
法政大学大学院中退(近代日本文学専攻)
現在，社会思想，文芸評論などで活躍
著書，『若き北一輝』(現代評論社)『風土からの黙示』(大和書房)『ドストエフスキイと日本人』(朝日新聞社)『竹内好論——革命と沈黙』(第三文明社)『思想としての右翼』(第三文明社)『中里介山』(朝日新聞社)『第二の維新』(国文社)『在野の精神』(現代書館)『戦後世代の風景 1964年以後』(第三文明社)その他

滅亡過程の文学

昭和55年10月24日　初版第1刷発行

定価1800円
著　者　松本健一
発行者　高橋直良
発行所　冬　樹　社
東京都千代田区神田神保町3-27-6
郵便番号101　振替 東京8-7757
電話　東京264-0346(代表)
印　刷　稲葉印刷株式会社
製　本　一重製本加工所

© Kenichi Matsumoto 1980　0095-10361-5190

滅亡過程の文学　目次

Ⅰ
漱石という逆説——夏目漱石 1……9
近代精神の悲劇——夏目漱石 2……28
過渡期の精神——芥川龍之介 1……42
知性の運命——芥川龍之介 2……60
Ⅱ
抒情の宿命——萩原朔太郎……85
方法としてのイロニー——保田與重郎……143
虚構としての歴史——小林秀雄……173

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

Ⅲ

純粋精神の行方――立原道造……201
ロマン主義からの回心――伊東静雄1……219
イロニーから自然へ――伊東静雄2……239
「合理」の精神――坂口安吾……257
あとがき……289
初出掲載誌一覧

高麗隆彦

滅亡過程の文学

I

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

漱石という逆説　夏目漱石 1

1

夏目漱石は、近代日本文学史のほとんど全過程を生きた文学者である。

これは、漱石の文学的生涯がそれほど長くつづいた、という謂いではない。改めて指摘するまでもなく、漱石の文学的生涯は、かれの名を高めた『吾輩は猫である』（明治三十八年一月）から、未完に終わった『明暗』（大正五年十二月）まで、僅々十二年にすぎない。

しかし、この漱石の十二年ほどの文学的生涯には、明治二十年代の、二葉亭四迷の登場によって象徴される近代日本文学の勃興過程から、昭和初年代の、芥川龍之介・萩原朔太郎に至って顕在化する近代日本文学の滅亡過程までが、凝縮されて刻まれている。わたしが漱石を、近代日本文学史の全過程を生きた、というのは、その意味においてである。

いったいに、作家はその処女作に回帰するなどというが、漱石を『吾輩は猫である』一篇によっ

て代表させることは、可哀そうである。かといって、近代小説の誕生を示したといわれる『明暗』一篇によって代表させることも、とうてい無理である。夏目漱石は、どうしても、『吾輩は猫である』にはじまり、『それから』(明治四十二年)をへて、『明暗』にたどりつく、といった過程をもつ文学者でなければならない。

だが、その漱石の個人的過程が、明治二十年代にはじまり、昭和初年代にいちおう終わる、近代日本文学史の全過程を象徴しているとするなら、そういった漱石の文学的変遷は、どのような内的必然性によってもたらされたのか。つまり、漱石をして、『吾輩は猫である』の世界から、『それから』の世界へと変転せしめ、そうしてそこから『明暗』へと移行せしめた契機は、いったいどこにあるのか。

ところが、処女作とよんでもよいだろう『吾輩は猫である』を、何度か読んでも、そこに『それから』への変遷を可能にする契機といったものを、ほとんど見出せぬのである。作中人物の苦沙弥先生がそうであるように、作者の漱石は、この作品の最初から最後まで、ほとんどその位置を変えていないのである。

たしかに、はじめは苦沙弥先生を中心とする知識人グループのカリカチュアとして描かれていた『猫』は、しだいに文明批評的性格をおびてくる。そのことによって、苦沙弥先生ら知識人の脆弱性・跛行性が、文明そのものの脆弱性・跛行性に由来するのではないか、ということを、作者も読者も認識するようになる。

『猫』の末尾が、次のような猫の独白にたどりついているのは、その意味で、きわめて興味ぶかい。

すなわち、苦沙弥先生を中心とする知識人グループがつぎつぎと退場し、秋の日もくれたあとで、猫はこう独白するのだ。「呑気と見える人々も、心の底を叩いて見ると、どこか悲しい音がする。悟った様でも独仙君の足は矢張り地面の外は踏まぬ。気楽かも知れないが迷亭君の世の中は絵にかいた世の中ではない。寒月君は球磨りをやめてとう〳〵御国から奥さんを連れてきた。是が順当だ。然し順当が永く続くと定めし退屈だらう。東風君も今十年したら、無暗に新体詩を捧げる事の非を悟るだらう……」、と。

知識人グループのカリカチュアとして描かれていた『猫』は、ここではその脆弱性・跛行性の批判へとたどりついている。そしてその批判は、そういった知識人を生みだした日本近代そのものへの認識を底にして生れている。むろん漱石は、いまだ、その認識に全面的に身をゆだねてゆこうとはしない。かれは、その認識に身をゆだねて小説を書きつづけようとすると、『猫』という小説世界それじたいが崩れてゆくことを知っている。

かくして漱石は、その一歩手前で手をとめたのだ。そのことによって、漱石は『猫』の冒頭の一節に集約される世界を、辛くも手元につなぎとめえたのだ。『猫』の冒頭の一節とは、周知のごとく、次のようである。「吾輩は猫である。名前はまだ無い」、と。

この一節には、『猫』という小説の、俳諧における諧謔の世界とか、漢詩における悲憤慷慨の世界とかが、象徴的に集約されているといえないだろうか。すくなくとも、時間の流れとか、意識の流れとかを追うといった散文の世界とは別のものが、この冒頭の一節にはある。

これは、しかし、『猫』についてのみいえることではない。『坊っちゃん』(三十九年三月)にも、

『草枕』（三十九年五月）にもいえることだ。『坊つちやん』の冒頭の一節は、次のとおりである。「親譲りの無鉄砲で子供の時から損ばかりして居る」、と。

そうして、『草枕』の冒頭の一節をつづけて引用すると、こうである。「山路を登りながら、かう考へた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角人の世は住みにくい」、と。

かくのごとく、『猫』『坊つちやん』『草枕』といった初期の三部作における冒頭の一節を抜きだしてみると、それがほとんど作品世界全体の象徴になっていることに気づかざるをえない。つまり、冒頭の一節で、世界は完結しているのだ。作品世界はいわゆるお釈迦さまの掌であり、作者漱石はお釈迦さま、というわけである。

これに対して、四年ほど後の『それから』（四十二年）の冒頭の一節を、次に抜きだしてみよう。こうである。「誰か慌たゞしく門前を馳けて行く足音がした時、代助の頭の中には、大きな俎下駄が空から、ぶら下がつてゐた。けれども、その俎下駄は、足音の遠退くに従つて、すうと頭から抜け出して消えて仕舞つた。さうして眼が覚めた」、と。

これは完結ではない。発端である。作品世界は、この発端から時間の流れ、意識の流れを追うようにひろがってゆく。散文の世界が、ここにはある。

『猫』の冒頭と『それから』の冒頭と、どちらが好ましいか、などということは、わたしにとってどうでもいいことである。問題とされるべきは、漱石がなぜこの四年間にそういった文学的変貌を示したか、ということである。

もし、漱石がそういった変貌を示さなかったなら、『猫』『坊っちゃん』『草枕』の作家は、いささか東洋文人ふうの傑れた作家ということで終っていたろう。『座談会・明治文学史』で、猪野謙二がいうように、それらは明治二十年代の文学としてでてきても、すこしも不思議でない。

猪野は、こういっている。「『吾輩は猫である』という小説が明治三十八年に書かれるわけですけれど、あの作品は、どうしてもあの時期に出てこなければならなかったという感じがちょっと薄いのですけれどもね。もっと早い時期に二十年代、三十年代の文学として出てきても、ちっともおかしくないというような気がするのです」、と。

この猪野の発言は、柳田泉の、越智東風とか水島寒月とかいった若い知識人階級は、しかし日露戦争を経過しないとでてこない、という発言によって修正されてはいる。が、その修正は登場人物の時代的性格においての部分修正であって、『猫』という作品が日露戦争後の明治三十年代末に現われなければならない必然性をいっているわけではない。

しかり、『猫』『坊っちゃん』『草枕』といった一群の小説は、明治三十年代末の現実を生きる、生きねばならぬ漱石の内的必然性によって生まれた作品ではない。それは、知的処理はされているが、いわゆる筆のすさびである。閑文字である。その閑文字であることを、ほかならぬ漱石自身が気づきはじめていた。それゆえに、『猫』の末尾に「呑気と見える人々も、心の底を叩いて見ると、どこか悲しい音がする」といった、悲哀の言葉を猫がもらさねばならなくなったのである。

むろん、これらの作品群は、作家としての漱石の名を高めた。ただ、名が高まってみると、じぶんが文学に求めていたものが名を高めることにはないこと、文学が閑文字ではすまないことに気づ

かざるをえなくなったのだ。作家漱石が成立してから、文学のあるべき姿に目がむいたということ、これは漱石におけるひとつの矛盾である。

しかし、その矛盾こそが漱石をして不断の自己否定の道を歩ませることになった契機なのではないか。『草枕』を書き終ったあと、漱石は鈴木三重吉宛の書簡（三十九年十月二十六日付）で、こういっている。「僕は小供のうちから青年になる迄、世の中は結構なものと思つてゐた。旨いものが食へると思つてゐた。綺麗な着物がきられると思つてゐた。詩的に生活が出来てうつくしい細君がもてて、うつくしい家庭が出来ると思つてゐた。もし出来なければどうかして得たいと思つてゐた。換言すれば是等の反対を出来る丈避け様としてゐた。然る所世の中に居るうちはどこをどう避けてもそんな所はない。世の中は自己の想像とは全く正反対の現象でうづまつてゐる。そこで吾人の世に立つ所はキタナイ者でも、不愉快なものでも、イヤなものでも一切避けぬ、否進んで其内へ飛込まなければ何にも出来ぬといふ事である。只きれいにうつくしく暮らす、即ち詩人的にくらすといふ事は生活の意義の何分の一か知らぬが矢張り極めて僅小な部分かと思ふ。で草枕の様な主人公ではいけない」、と。

むろん、『草枕』の主人公のように、詩的に生活してみたい、閑文字だけを弄んで生きてみたい、という漱石の欲望が全的に放棄されたわけではない。そういった欲望は欲望として残滓のようにかれの内に残されつつも、日露戦争後の、つまり明治国家の変動期の明治三十年代末の現実を生きるためには、みずからの閑文字を徹底的に否定してかからねばならぬ。かくして、漱石は文学者として生きるために、『猫』の作家としての自己を否定しなければならなくなったのである。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo